

2023年4月23日復活節第3主日

イザヤ書第43章1-12節b  
使徒言行録 2章14a, 36-47節  
ルカによる福音書第24章13-35節

急に春を超えて夏日のようになりました、と金曜日までの原稿に書いてあったのですが、本日は少し肌寒いようです。気温の変化が激しいですので、皆様どうぞ体調にはお気を付けください。

わたしたちの礼拝も本日から変化があります。聖歌を5曲歌い、キリエなどを全員で歌う部分を再開いたします。より制限の少ない礼拝ができますこと、喜びではありますが、発声時のマスクの着用をまだお願いする状況でもありますので、くれぐれもご無理はなさらないようお願いいたします。

さて、本日の旧約日課は、「イザヤ書」にある、バビロン捕囚からの解放について語っている個所です。「ヤコブよ、あなたを創造された主は、イスラエルよ、あなたを造られた主は、今、こう言われる」（イザヤ43:1）と始まりますが、ヤコブとは、イスラエルと同じ意味です。最初に、主なる神様が、ヤコブ・イスラエルを造られたという、根本的な事柄が宣言されます。歴史的な考察では、別の見解があるかもしれませんが、「イザヤ書」は、イスラエルという集団は、人間が意図して集まった集団でも、自然発生的に出来上がった集団でもなく、主なる神様が、造られた集団であると明示しているのです。

そのことを前提に「恐れるな、わたしはあなたを贖う。」（イザヤ43:1）と続きます。贖うとは、買い戻す、代価を払って取り戻すということです。なぜ、贖いが必要なのか、それは主なる神様の意図通りには歩まなかったイスラエルが、王国滅亡と離散という危機的状況に引き渡されたからです。しかし、主なる神様は、バビロン捕囚という贖いの帰還を経て、もう一度彼らをカナンの地に戻すのです。この出来事は、小国イスラエルが、大国であるバビロニアとペルシアの対立関係の中で起こった歴史的出来事に基づいています。しかし、「イザヤ書」は、その背景に主なる神様とイスラエルとの関係を見るのです。

主なる神様とイスラエルとの関係、それはイスラエルが「わたしの名によって呼ばれる者。わたしの栄光のために創造し形づくり、完成した者」（43:7）であり、「わたしはあらかじめ告げ、そして救いを与えあなたたちに、ほかに神はないことを知らせた。あなたたちがわたしの証人である、と主は言われる」（43:12）とある通り、主なる神様によって創造されたがゆえに、主なる神様を証しする使命を負った存在であるということです。そして、その関係において、証人である以上、主なる神様の意思を理解し、それを行動によって示すことが大切なのです。ただし、イスラエルはただそれを受動的に行うのではなく、主体的に主なる神様の意図に則した歩みをするのが大切なのです。

考えることは大切であるが、その考えが主なる神様の意図から離れて張ら

ない、それは簡単なようで難しい事柄です。それゆえに、主なる神様は、イスラエルの声を聴き、祭司、王、預言者を通して、何度も正しい方向へと導こうとされていました。主なる神様がそのようにイスラエルを導こうとする理由は、「わたしの目にあなたは価高く、貴くわたしはあなたを愛し、あなたの身代わりとして人を与え国々をあなたの魂の代わりとする」(43:4)とある通り、主なる神様がイスラエルを愛しているからです。だからこそ、いったん王国が滅び、バビロン捕囚を体験し、壊滅状態になったイスラエルを、見捨てることなく、もう一度導こうとされるのです。そのことからいけば、主なる神様とイスラエルとの関係の根底に、愛だということができると思います。

ただし、今日視点から見ると、「イザヤ書」あるいは『聖書(旧約)』全体が主張するような、主なる神様のイスラエルに対する愛は、イスラエルだけを偏って排他的に愛したように思えます。そして、この主なる神様の愛が、イスラエルの出エジプトに際して、たくさんの犠牲者を出したのではないかという問いが起きます。イスラエルへの救いは、エジプト人への悲劇につながったように思えるからです。しかし、主なる神様は、何の前触れもなく、イスラエルを導いたのではありませんでした。モーセを通して、エジプトのファラオには、主なる神様がイスラエルの解放を命じていると告げられました。そのやりとりは「出エジプト記」に「その後、モーセとアロンはファラオのもとに出かけて行き、言った。『イスラエルの神、主がこう言われました。「わたしの民を去らせて、荒れ野でわたしのために祭りを行わせなさい」と。』」ファラオは、『主とは一体何者なのか。どうして、その言うことをわたしが聞いて、イスラエルを去らせねばならないのか。わたしは主など知らないし、イスラエルを去らせはしない』と答えた。」(出エ5:1-2)とある通りです。主なる神様がエジプトの人々を愛されたという文言はありませんが、主なる神様は何のためらいもなく、エジプトの人々を犠牲にしたということではないのです。

いつの時代でも通用することかもしれませんが、出エジプトの出来事とは、ファラオという指導者の知識と見識、判断力が試された時であったのだと思います。ありえないことかもしれませんが、エジプトのファラオが、自分に向けられた主なる神様の言葉に、愛を感じていれば、そしてその愛にもっとも高い価値を置いていれば、出エジプトの出来事は、平和的な解決をしていたのかもしれませんが。

「イザヤ書」そして出エジプトの出来事の背景にあるものは、主なる神様の愛です。そして、その愛は、世界全体、すべての人と造られたものに及んでいます。『聖書(旧約)』においてもそのことは暗示されていましたが、もっとも明確に示してくださったのが、イエス様の出来事です。イスラエルが主なる神様の証人であること、それは愛とは何かを示す証人であるということです。教会に集められる私たちも同じです。世界では戦いがまた新たに始められ、国内でも選挙という場ですら暴力が振るわれます。そのような世界ですが、主なる神様は愛してくださっています。礼拝と交わりを通して、主なる神様のその愛を示していきたいと思えます。